



縄文土器と弥生土器

琉球大学大学院 感染症・呼吸器・
消化器内科学（第一内科）教授
藤田 次郎

物にはめぐり「会う」のだと思う。

教授室には様々な物があるが、稲嶺盛吉さんの琉球ガラスと、故島常賀氏のシーサーと抱瓶が輝きをはなっている。

稲嶺盛吉さんの琉球ガラスとの出会いは、医局の秘書さんが、冷茶用のグラスをプレゼントしてくれたことであった。そのグラスは今も愛用しているが、素晴らしい質感と涼しい色合いを持っている。

その後、2005年8月、石垣島に旅行した際に、請福酒造という店を訪ねた。酒造所であるので当然泡盛を購入するつもりで店に入ったが、むしろ目にとまったのは、店内の棚に並べた稲嶺盛吉さんの作品であった。泡盛はお土産用のもののみ購入し、一目惚れした稲嶺盛吉さん作の琉球ガラスを店主に頼みこんで売っていただき、飛行機の中で大事に抱えて帰った。その後は、年数をかけて気に入ったものを購入し、自宅で使用するガラス食器は全て稲嶺盛吉さん作のものとなった。



図1 自宅にある稲嶺盛吉さん作の琉球ガラス
(藤田祐介撮影、第3回沖縄の水 デジタル
フォトコンテスト特別賞受賞、2007年9月)

さて2007年9月に沖縄県企業局が企画した「第3回沖縄の水 デジタルフォトコンテスト」という催しで、中学生部門の特別賞に息子の撮った写真が選ばれた(図1)。写真は普通のデジカメで撮影したもので、稲嶺盛吉さんのガラスの素晴らしさが賞に選ばれた最も大きな要因であると考えている。

次は島常賀氏の作品との「出会い」である。

琉球大学医学部に赴任してしばらくしてから、琉球大学のキャンパス内に素晴らしいシーサーが2体あることに気づいた。この2体のシーサーが故島常賀氏作であることは、事務方から聞いた。島常賀氏について調べると、沖縄県ではシーサー作りにおいては、右に出るものはいないと称される、シーサー作りの名人であることがわかった。

2007年7月に、写真家三好和義氏を沖縄に招き、琉球大学医学部の風景を写真に収めてもらった。中庭や病棟の風景、琉球大学医学部の全体像の写真と共に、島常賀氏作のシーサーの素晴らしい写真も出来上がった(図2)。もちろんシーサー本体のパワーもすごいが、それに負けないだけの素晴らしい芸術的な写真であると思っている。

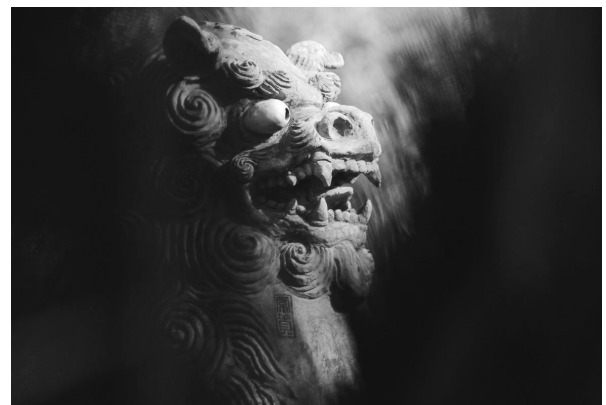


図2 琉球大学医学部のキャンパスにあるシーサー
(島常賀作、常賀のサインがはっきりと見て取れる、
三好和義氏撮影)

シーサーは守り神である。私はこの写真を、自分が学会長であった第61回日本呼吸器学会・日本結核病学会九州支部 秋季学術講演会(2008年11月6~7日)のプログラムの表

紙に使った。学会期間の天気予報は雨であったが、2日間とも天候に恵まれ、11月にもかかわらず気温はどんどん上がり夏日を記録した。学会そのものも医局員の尽力で成功したが、沖縄コンベンションセンターに集まっていた県外の方々に沖縄の青い海を見てもらったことが嬉しかった。

学会が終了した次の日、故島常賀氏の家にお礼に行こうと思った。漫画「美味しんぼ」28巻を読んでおり、島常賀氏の自宅が壺屋にあることは知っていたものの、何の下調べもせず壺屋に向かった。当然のことながら島常賀氏の自宅は見つかるはずもなく、壺屋の細道で迷子になった。そこで、たまたま道の片側に駐車した車から降りてきた中年の男性に、「島常賀さんのお宅はどこでしょうか？」と尋ねたところ、「なんで島常賀の家を探しているのですか？」と逆に尋ねられた。学会のプログラムを持っていたので、琉球大学に勤務する医師であることを告げ、プログラムを見せたところ、納得され、「私は島常賀の息子です。これから案内します。」という信じられない展開となった。

故島常賀氏の自宅には、もう誰も住んでおらず、鍵もかかったままであった。中に入ると自宅は「美味しんぼ」に出てくる絵とそっくりであり、「美味しんぼ」の作者も取材に訪れたの

だと理解した。自宅内には作りかけのシーサーなどがあったものの、晩年のものであるせいか、力は乏しいように感じた。息子さんは何を思ったか、2階に上がり、見事なチブルシーサーを抱えて階段から降りてきた。このような経緯で、故島常賀氏作のチブルシーサーが教授室に鎮座することになった(図3)。島常賀氏の自宅の2階に長く保管されていたものである。私は、このシーサーを「桃太郎」と名付け、可愛がっている。

2011年3月11日の東日本大震災の直後、不思議なことがおこった。たまたまインターネットで、島常賀氏作の抱瓶を見つけ、出品者と連絡を取ったところ、相手は東京に住む上品な女性で、「沖縄の方で、島常賀さんのものがお好きな方ならお使いください。無料でどうぞ、送料もいりません」という信じられない展開になった。もちろん送料まで無料という訳にはいかず、震災の義援金も含めて若干の金額を後で振り込んだものの、見事な抱瓶が教授室の棚に収まることになった(図4)。私はこの抱瓶を「龍次郎」と名付け、その力強さに感嘆しながら眺めている。非科学的ではあるが、大地震にもかかわらず、奇跡的に無傷であった「龍次郎」を、教授室の「桃太郎」が、「故郷の沖縄に戻っておいで」と呼んだのではないかと思っている。



図3 島常賀氏作 チブルシーサー

故島常賀氏のご自宅の2階に、長年置いてあったもの。不思議な縁で私の部屋に収まることになった。常賀のサインも見てとれる。「桃太郎」と命名した。



図4 島常賀作 抱瓶

大震災直後、無料で良いという東京の見ず知らずの女性から私の部屋に届けられたもの。底部には常賀のサインが入っている。「龍次郎」と名付けた。

